

■H30.9.10 市長定例記者会見内容

日時 平成30年9月10日（金）午前11時～

場所 庁議室

出席 市長、副市長、危機管理監、企画部長、企画調整課長、港湾交通主幹、国際交流主幹、広域行政組合消防署、市長公室長
酒田記者クラブ 8社（山形新聞、荘内日報、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、河北新報、NHK、SAY）

■内容

1. バスロケーションシステムの導入について

酒田市福祉乗合バス（るんるんバス）に、スマートフォンなどで運行状況を確認できるバスロケーションシステムを導入する。導入は10月1日から。

スマートフォンなどからアクセスしたウェブ上に現在のバスの位置が表示され、ダイヤの遅れが一目で分かるようになっている。冬期間はバスの遅延が多いことから、待ち時間を有効に活用してもらいたいと考えている。

対象路線は、るんるんバスの5路線（市内循環右回り線、市内循環左回り線、酒田駅大学線、古湊砂越駅線、酒田駅かんぼ線）。

バスにスマートフォンを設置し、GPS機能で走行位置を把握する。

市町村が運営するバスでは県内初。10月1日広報で周知し、バス停にもお知らせを貼っている。

記者／八幡や平田のバスにはこのシステムはないのか。

市長／市街地の運用実績を検証しながらいろんな路線の導入を検討していきたい。

記者／るんるんバスの路線の5路線の運用か。

市長／その通り。

記者／観光客がよく利用する路線はどこか。

副市長／酒田駅大学線あたりがよく使われる。

記者／昨年度から使いやすい公共交通のあり方を市民から聞いていたが、その結果生まれた事業なのか。

副市長／そこでも意見が出ていた。以前から検討はしていたが価格が高く導入できなかったが、ようやく運用可能な価格になった。

市長／2005年から4年間実証実験をやった。当時は費用対効果を考えたときに導入できなかったが、システムが普及することにより安価になった。

記者／バスファンクラブの場でもこういったシステムに関する意見は出たのか。

副市長／意見があった。

記者／このシステムは10月1日からアクセスできるようになるのか。

市長／その通り。記載のアドレスで運用を開始する。

副市長／今も試運転をしている状況。

記者／操作方法を教えてください。

市長／（デモンストレーション）

記者／バスを使うときに、もう行ったのか、これから来るのかわからなかった。これで市民や観光客もわかりやすくなるが、バスの利便性など、どのように使ってもらいたいか。

市長／今、全体的な公共交通網の見直しをしている。住民も観光客もより使いやすく便利なバス運航システムを路線も含めて考えていきたい。そのためにもこのシステムは、重要なツールであると考えている。

記者／アプリか。

市長／アプリではない。Web運用である。

記者／運営しているのはどこの業者か。

商工／KCSという会社。

記者／初年度業務委託料が135万円とあるが、市の負担はこれだけか。

市長／その通り。

記者／年配者はスマホを持っていないがどうするのか。

市長／啓発していくしかない。一緒にいる人に教えてもらいながら情報を共有してもらえそうな仕掛けが必要かもしれない。

記者／ガラケーでも使えるのか。

市長／使える。

◎フリー質問

【市長選の対応について】

記者／昨今、山形市長が次期選挙戦に立候補の意思を表明した。酒田市長選まで約1年となったが、現時点で出馬の意向はあるのか。また言及できなければ、いつごろ意思表明する予定か。

市長／今は決算議会中なので、現時点では審議に全力で当たっていきたい。4年目になるが仕上げの部分、何をなすかに全力投球していく。これから新年度予算に入っていくが、市長選に関しては後援会の皆さんと相談しながら判断していきたい。今のところはまったく白紙の状態である。

【災害の対応について】

記者／8月に複数回水害に見舞われたが、その直前には渇水の状態も見られた。その大雨による増水および少雨による渇水への今後の対応策について伺いたい。

市長／濁水、海水の遡上、少し前まではよくあった飛島の濁水などは、常に意識があったので驚きではなかったが、雨の災害である堤防越水や土石流などの事態は、正直自分としてはあまり想定はしていなかった。最上川のような大きな川が氾濫するかどうか、実は焦りがあった。市長になって一番不安だったのが、実は災害対応だった。市民の安全安心を守るためにきちんと組織だった行動を取れるのか、それを自分が指示できるか不安だった。職員は頑張ってくれた。早い避難情報、避難勧告、避難指示を出せし、市民も速やかに避難していただけたと思う。対応としてはまだまだ不十分なところがあるが、今回の対応をいい反省材料にして、万全な体制作りに取り組んでいく。北海道の地震のように突然起こることなので、他人ごとではなく自分事として考えていく。ライフラインの一日も早い早期復旧を意識的に考えていかなければならない。

記者／一般の人が川に見に来ていた。危険だがなかなか周知は難しいと思うが。
市長／行政としては警察に頼ったところがある。普段からの啓発が大事だと思う。荒瀬川の氾濫も驚いた。くれぐれも近づかないように啓発していくしかない。

【公文書管理の見直しについて】

記者／第三者委員会の調査票の破棄について、文書管理は問題ないのか。
市長／破棄したのは確認していない。第三者なので法律の専門家に委ねている。この件は裁判になっているが、調査資料の提示を求められることがあるかもしれないのに、破棄するという事はないと思う。弁護士の方々なので、裁判で必要な場面が出てくるかもしれないものを破棄するはずがないと思うが。あたかも市の指示で破棄したかのような報道はおかしいのではないか。任意の独立した機関のことなので、そんなことはしないとと思う。

記者／公文書の管理を見直しする考えはあるか。
市長／第三者委員会の調査票は、公文書ではない。公文書については組織全体で議論すべきだと思っている。今回の件は全く別の話。

【新幹線について】

記者／県ではフル規格を進めていて、山形新幹線の延伸は難しいので、陸羽西線の利用促進に力を入れていくということだったが市長の認識は。
市長／トーンダウンといわれればそうである。山形新幹線の延伸のみで訴えてきたが、陸羽西線の利用状況から廃線になることもある状況である。延伸の考えでは県内のネットワークを重視してきた。フル規格新幹線を県で頑張っている動きの中で、延伸の運動を展開するのは冷静に考えなければならない。陸羽西線が廃線にならないようにすることを考えなければならない。米沢まで1本で結ばれるのは大切なこと。フル規格に関しては県と足並みをそろえていかなければならない。ただ延伸をあきらめたわけではなく、市としては県に作ってもらいたい。県民会館、スタジアムなど県の施策としてある

ので、そこまでの足の確保、年配の方でも安心して山形に出かけられる環境を作ること
は県の考えとしてあってもしかるべきだと思う。

記者／陸羽西線の利用促進に向けた取り組みは。

市長／イベント列車など考えなければならない。新庄市とも調整が必要。新庄まつりな
どいいきっかけになると思う。